

戰後日本文学管窺

—中国的視点—

李 德 純



明 治 書 院

著者略歴

李徳純（リー・ドウツウン）

1926年、中国遼寧省に生まれる。1944年に来日して旧制一高に入学。中退して中国に帰り、革命後外交官となるが、文学の熱さめやらず、職を辞して、日本の戦後文学の研究を続ける。中国社会科学院外国文学研究所員。中国日本文学研究会理事。日本大学客員教授として1982年11月、1985年10月に来日。翻訳に、井上靖『闘牛』、川端康成『伊豆の踊子』、三島由紀夫『潮騒』などがある。

翻訳者

杉山太郎・高橋政陽・谷部弘子・長堀祐造・芳賀晴一・林芳・藤重典子

☐世界の日本文学シリーズ 1

戦後日本文学管窺—中国的視点

定価 2,800円

昭和61年5月31日 発行

著 者 李徳純

発行所 株式会社 明治書院

代表者 三樹彰

印刷者 精文堂印刷株式会社

代表者 西村弥満治

製本所 高陽堂製本

発行所 株式会社 明治書院

東京都千代田区神田錦町1-16

郵便番号 101

電話 東京 (03) 292-3741代

振替口座 東京 3-4991番

©Li Dechun 1986 3393-20179-8305

序

井上靖

李徳純氏の「戦後日本文学管窺——中国的視点」を、いろいろ教えられるところ多く読ませて貰った。戦後日本文学のよき紹介であり、よき解説であり、よき批判であると思つた。標題には「中国的視点」と断わり書きが添えられてあるが、まさしくその通り、中国の一人の文学者の立場からしての戦後日本文学の解説であり、批判であり、そして何よりも愛情を持ったよき紹介であると思つた。

それはそれとして、著者・李徳純氏がこの仕事に投入された情熱と努力はたいへんなものであると思う。私の場合だけを考えても、戦後間もなく発表した一群の作品が、このように丁寧に読まれ、戦後という特殊な時期の照明が作品のすみずみまで当てられたことはなかったと思う。正しく読んで貰った、そんな思いであつた。

こうしたことは氏が中国的視点に立つことによつて、初めて可能なことであつたかも知れないし、そしてまた氏が「文革」や「四人組」の特殊な政治的時期を体験した中国の文学者であるということも亦、大きい役割をしているかも知れない。その態度は真摯であり、真摯の一語につきるかと思う。

今や日本文学は、あらゆる種類の作品が、中国に於て大々的に翻訳され、紹介されようとしている。こういう機運を迎えて、それが正しく推進されるよう、李徳純氏の仕事に、氏の立場に期待するところ極めて大きいものあるを覚える。氏の一層の自重と、活躍を期待して已まない次第である。

序

長谷川 泉

日本の戦後文学は、その本態を把握しにくい最たるものである。その理由は、幾つかあげられると思うが、史的沈静の時間的経過の未成熟が、外面的理由の第一である。日本の戦後の社会的、文化的構造の錯雑ということが、内面的理由の第一である。

長期にわたった鎖国を解いた文明開化以来の日本の性急な近代化の運命が、集約的に顕現したのが、戦後であった。軍事的被占領に始まった状態が、精神的被占領をも伴って、骨がらみの病根となり、現在にまで到っているのが、日本の戦後である。文学も、その影響を免れ得なかったのは、当然である。

このたび纏められた「戦後日本文学管窺」の著者は、副題に「中国的視点」と明確に規

定しているように、日本の戦後文学が、一衣帯水の地、中国において、どのように把握されているかという観点で叙述されている。本書によって、プロ文革後の中国における開放的な文学風土を逆照射することも、可能となる。

「一、戦後日本小説の流れ」「十二、戦後詩について」のように、巨視的な展望、概論風な論文もあるが、概して言えば、各作家・各作品に粘着しての味読の果てに構築された体系的整理の見事さを見ることが出来る。作品の筋立てや、作中の登場人物などについての解説も懇切である。これは大変な努力と識見を要する大業である。

「中国的視点」をもつてすれば、社会的骨格を持った作品や、不幸な戦争問題、あるいは構造的腐敗を剔抉する主題を扱った作品や作家が関心の的となり、また照明を与えられるのは、当然だと言える。だから「八、社会派」の論文があり、また広津和郎・石川達三・松本清張・有吉佐和子・山崎豊子らの作品系譜に寄せる関心が、理解できる。しかし、本書には、川端康成の「伊豆の踊子」「雪国」なども扱われている。特に唯美主義と虚無主義、「魔界易入」の思想とが膚接して成立している「雪国」が削除なしの完全状態で享受され研究されている現状を知り得ることは、瞠目に値する。「管窺」は謙辞であるとも言える。

「附録」の「(二)『伊豆の踊子』私論」および「(三)中国における『雪国』論争」の内容は、私が会長をつとめている川端文学研究会で発表して貰った論文である。「雪国」論争の問題点は、論議の焦点が、よく整理・概観されており、発表された際、日本の若い研究者たちを感嘆させた雰囲気、私は今なお生き生きと想起することができる。

著者が、井上靖氏や有吉佐和子らを初め、日本の文壇人と個人的な友好・交流の実をあげていることが、本書の随所に、ヒューマンな色調と輝きを顕現している。その一部は、口絵の素材としても活用されている。

「附録」の「(一)島崎藤村『家』小論」に扱われた「家」は、厳密には明治文学であり、戦後文学ではない。しかし、日本の近代文学を培った文芸思潮の大きな一つに自然主義があり、「家」はまぎれもなく自然主義の代表作である。その手法と内実は、日本の戦後文学に示唆する錘鉛の一つともなっているのである。いわゆる第三の新人といわれる作家たちの方法に残存し薫染している、日本独自の私小説の遙かな源泉でもある。

「十一、現代派」として安部公房・大江健三郎・開高健を論じた章は、興味を惹くものがある。日本の読者の、特に若い世代の関心が大きいからである。

ともあれ、本書の出現をたたえる。

本書が、中国人によつて日本で上梓された、この種の著書の嚆矢として、貴重な役割を担つて行くことを信じて疑わない。

一九八六年四月

もくじ

序	井上靖	1
一、戦後日本小説の流れ	長谷川泉	3
二、戦後派		54
三、三島由紀夫		73
四、広津和郎と『泉へのみち』		83
五、井上靖		90
六、松本清張		108

七、司馬遼太郎 129

八、社 会 派 141

九、有吉佐和子と『非色』 149

十、石原慎太郎 155

十一、現 代 派 162

十二、戦後詩について 170

十三、附 録

(一) 島崎藤村『家』小論 207

(二) 『伊豆の踊子』私論 213

(三) 中国における『雪国』論争 223

(四) 弛まざる探求者——有吉佐和子への悼念 236

(五) 孤独だが幸せ——石川達三へ捧ぐレクイエム 249

訳者付記 杉山太郎 259

あとがき 263

一、戦後日本小説の流れ

戦後初期日本文学の顕著な特徴は、まず戦前から盛名を博していた老大家たちが長かった日本軍国主義の桎梏を破り、営々として創作の筆を執り、沈滞した文壇を揺るがせ、新しい活力を示したことがある。

明治維新以来八十余年に亘って建設されてきた文化と社会は、戦前の軍国主義とファッショ的文化専制主義の時代、重大な破壊に遭遇した。文学もまた、歴史上未曾有の凋落状況に置かれ、たまさか出版される作品の質は低劣、おおむね軍国主義の政治理念とファッショ的政策の要請に應えるために、単一の色調に染着された作品しか存在は許されなかった。戦後初期の読者は長期に亘った文化的飢餓に苦しんだ後、あたかもその飢えを満たすが如く、書物を求め、その読者の飢渴を癒すべく、様々な雑誌が雨後の筍のように創刊されたのである。

これらの雑誌には、戦時中節操を守り、息を潜めていた作家たちの旧作が競って掲載された。谷崎潤一郎は『細雪』（一九四八年）において、大阪船場の豪商蒔岡家の四姉妹それぞれの運命から社会の歴史的な急変を描出した。四人の女たちの各人各様の個性的な性格が書き分けられていながら、しかも、彼女たちには時代と家庭が賦与した共通性が認められる。

永井荷風は、踊り子部屋に出入りする貧民窟住まいの出前持ちの悲惨な生涯を素材にした小品『勲章』（一九四六年）、下積みのダンサーの漂泊の生活を描いた『踊子（舞女）』（一九四六年）を書き、徳田秋声は侮蔑され凌辱される女性の悲惨に同情を寄せた『縮図（縮影）』（一九四六年）等の作品を相次いで世に問うていた。

これらの作品群は、四〇年代という白色テロルの横行していた日本文壇の最暗黒時代に、あるいは一部が発表されたものの中断の已む無きに至り、あるいは捜査の危険を冒して秘かに執筆されたものであり、貴重品と呼ぶに相応しい。

その他の作家たちも、多年擱^おいていた筆を執り、各々の風格を持った新作を発表しはじめる。「早稲田文学の領袖」丹羽文雄と舟橋聖一は、芸者と酒場の女たちの生活を素材にした「風俗小説」を次々に発表し、特異な世態風俗を描出した。

この時代の作品について指摘すべきはすなわち、文壇全体が新たな磁場への探求を始めた、という

点である。戦時中に開始された歴史への内省から、民族心理と文化の根源への探索が進み、文学の視点に大きな転機が齎された。作家たちの中には、自らの作品で軍国主義を叱責したものもいたのである。

夏目漱石の弟子、野上弥生子が『狐』（一九四六年）の中で描いた人物は、「九・一八事変」後の日本軍国主義の中国への武装侵略に一貫して反対し、太平洋戦争前夜に兵役から逃避し、病氣と称して農村で狐を飼うのを楽しみとしていた正義感に満ちた知識人である。彼は胸を病み、「快くなれば引つ張りだされるのだと思ふ絶望」に捉われ、病氣で死ぬことにむしろ「甘い誘惑」を感じさえしていた。林芙美子の『うづ潮（旋渦）』（一九四七年）は、戦死した兵士に遺された家族が戦後の失意の生活の中で展開した、意志に力量の伴わない掙扎を描写している。

正宗白鳥の『戦災者の悲しみ（戦争被害者の悲哀）』（一九四六年）と、宇野浩二の『思ひ草（回憶草）』（一九四六年）では、戦時下の知識人の離散と困苦が、理不尽な創造生活の破壊のために発せられた如何ともしがたい嗟嘆の聲が、凝滞莊重な筆により伝えられている。

プロレタリア作家宮本百合子の『播州平野』（一九四六年）『風知草（知風草）』（一九四六年）、及び徳永直の『妻よねむれ（妻啊、安息吧）』（一九四六年）等はいずれも、戦後民主主義文学の代表作である。百合子はその二編の小説において、自らの経験と体験から戦時中の窮乏流浪の生活と抗うヒロインの奮闘を描き、女流作家の過去の憤りと苦しみを表現した。徳永直の中編小説『妻よねむれ』では、戦

争中心身に受けた数々の苦難による病氣との長い闘いの果てに、世を去った作者の妻の姿を通じ、人々の戦時中の名状し難い辛酸を叙述している。

二人の小説は、確かに自況自述的な色彩を色濃く帯びてはいる。しかし作品の役割と影響は個人の自伝の範囲を大きく越える。読者の眼前に展開される暗澹たる日常には、紛う方なくあの悪夢の如き歲月への作家の怒りが凝縮されているのである。あの荒廃の時代の厳然たる現実、知らず知らず読者を歴史と戦争への省察に導く。あの戦争で日本が得たものが栄光と隆盛ではなく、恥辱と災厄であったことを。

これらの作品群は、戦時中の生活を凄惨に描写することにより、ファシストたちの政治的弾圧と経済的搾取を示し、軍国主義の好戦政策への譴責となり、また濃密な悲劇の香りが平和への渴望を伝えてくる。作家は、怒り、沈潜する。作中人物の反戦への態度が一般的に多少消極的だとしても、人々が劫火に焼かれた悪夢の如き日々を書くことは、ファシシヨ的白色テロルの下にあつて一定の進歩的意義を持つていたのである。

井伏鱒二の短編『遙拝隊長』（一九五〇年）は賞讃に値する。作者は、軽蔑すべき、怒るべき、しかも同情すべき人物、軍国主義に毒された愚昧にして盲信的な形象岡田悠一を、風刺とユーモアあふれる筆で描いている。第二次世界大戦中に中尉としてマレー戦線に逐われ、戦後農村に復員してきた岡田小隊長は、依然ファシスト軍人の旧套を保ち、好いものを手に入れ、何かというと人に号令をかけ

て、皇居への「遙拝」を強い、「皇恩」への謝意を表させる。日本軍国主義が推進した武士道愚民政策は、人の良識を踏み躪り、精神文化を汚染し、愚昧と盲信を産み出し、人々の心理的健全さを失わせた。武士道が醗酵したものは、半世紀に亘る政治的悲劇であった。戦争中、この愚昧は狂気の域に入り、数千万の人々に病的な熱狂と暴虐な気分を齎した。これは紛う方なく民族の自殺行為であり、民族に重大な危害を被らせたものである。

岡田悠一は、この武士道が生んだ芸術的典型である。軍国主義が壊滅したとしても、岡田の身体にはその烙印が深く焼き込まれている。それは軍国主義が形成した悪劣な政治環境の生んだ畸形的人物であり、人に思考を迫る典型的な芸術形象である。

この短編を読んだ読者は、作家が小説の思想的な深度を求めていることを知る。このような題材の小説では、主人公の動乱の時代における悲惨を描くことにより、軍国主義の罪惡を開示するのが一般的であろう。しかし、『遙拝隊長』では思想的な深度が追求され、軍国主義壊滅の後も、軍国主義が刻印した習慣が現在に至っても身体に沈澱している岡田のような頑迷な人物が描かれている。日本軍国主義が打倒されても、依然世間の片隅を徘徊している軍国主義の亡霊と軍国主義の遺毒、その思想的影響を徹底的に清算することは、決して容易なことではない。

この短編は構成も緊密で、諧謔に満ち、喜怒哀楽の極致の文章となっている。喜劇的な色彩の中に悲劇の香りが濃厚に漂い、風刺とユーモアの中に血と涙が滲む。歴史を逆行させようとする軍国主義

の亡霊が無情に暴き出され、人々の笑声の中で歴史の屑籠の中に送り込まれる。岡田悠一の形象に読者は愚昧と頑迷を感じ、そしてその裏にこのように汚されてしまった魂への作家の憎悪を読みとることになる。さらに、社会生活と渾然一体となり潑刺とした現実感あふれる東方日本民族のユーモアのセンスと、率直でしかも妙趣横溢した描写が、作品に読みやすさを齎し、善悪美醜を啓蒙するのに力あることは指摘しておかなければならない。

田宮虎彦の『絵本（画冊）』（一九五〇年）は別の側面から、軍国主義への血と涙の抗議の声をあげた。中学生福井義治の家族が人々の蔑視と攻撃を受けていたのは、兄が捕虜になったというだけの理由であった。義治もまた、年齢不相応な精神の重荷を背負わなければならなかったのである。

一八世紀フランスの偉大な啓蒙思想家デイドロは芸術について、「望むべき真正の喝采とは、美しい詩にむなしく発せられる拍手ではなく、長時間の沈黙の後に魂の深部から発せられる嘆声である。……全国上下層をして厳肅に問題を思考せしめ、居ても立つてもいられない状態におかせることである」と述べている。上の二作品は、ある程度このような効果をあげているといえよう。

戦争は歴史の範疇である。その具体的な内容と特色は時代の変化に伴って変わる。それは古く、また常に新しい。表面的に見るとこれらの作品は、剣戟の響きから遠く、戎馬の嘶きも聞こえない。多くは個人的な回憶に沈潜しているように見えるが、しかし、少なからぬ作品が歴史の縦横性を自覺的